

(株)オリエンタル・コンサルタンツ 正会員 ○安田 寿之
立命館大学理工学部 正会員 笹谷 康之
立命館大学理工学部 学生会員 山口 貴生

1. 序論

水辺景観としては、従来、河川、港湾、海岸を対象とした研究は多かったが、湖岸を対象とした例は少ない。湖岸は他の水辺と異なり、水位の上下、流れ、波浪が小さく、独自の景観デザインが求められている。そこで、日本最大の湖である琵琶湖を事例に、湖岸の地形に着目して景観型を抽出し、型にふさわしい整備対策を明らかにした。

2. 分類型の抽出

「型」として採用するための条件として、上島・篠原の型分類¹⁾を参考にしながら、「同じ型」で「同じ利用」がされていることとした。琵琶湖の現地調査を基に、原則的に人工的な改変が加えられていない地形型を「原地形型」として4型、加えられている地形型を「アース・デザイン型」として5型抽出した。

型			定義	空間特性
原地形型	浦型		湖水面に対して凹状の平面形状を持つ地形	拠点性
	崎型		湖水面に対して凸状の平面形状を持つ地形	誘引性
	丘型		利用が湖水面と関係のある水辺近くの丘陵	眺望性・隔離性 誘引性
	内湖型		湖岸において湖水が陸地側に入り込み小さな湖ができている形態	拠点性
アース・デザイン型	突出型		平面形状において湖水面側に突出する形態	誘引性
	隅入り型		平面形状において隅入りのエッジを作る形態	拠点性
	内水面型		比較的水辺近くで湖水面を陸地側に取り込み利用している形態	拠点性
	引き込み型		比較的水辺から離れた場所で湖水面を陸地側に取り込み利用している形態	拠点性
	出島型		橋によって陸地と繋がれた陸域的空間	隔離性・誘引性

3. 分類型を視点にした対策

原則的に自然景観が残されている原地形型は造成など行わず地形を生かすように、アース・デザイン型はそのデザイン型の特徴をうまく利用できるように考えるべきだ。上で挙げた9つの型について整備の方向性を以下に示す。

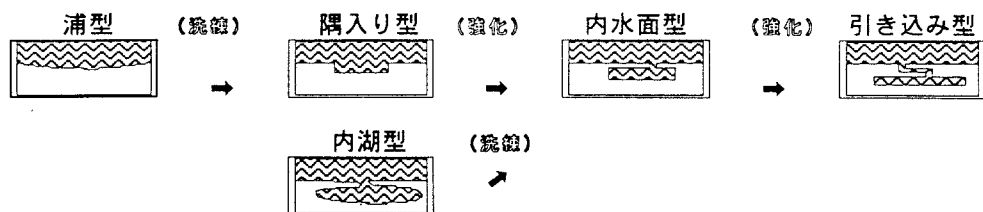


図1 凹型平面グループ

図1の凹型平面グループに共通する空間特性は拠点性である。これは、居住性や安息性に富み、抛り所や活動拠点になる特性である。従って、これらの型では船着き場、ウォーターレクリエーションの場、住宅地として利用すべきである。また、発展した型である内水面型や、引き込み型では、従来湖水を農業用水として取水したり、釣り堀に利用してきたが、今後は日常生活の延長になるような庭園や料亭、プレジャーボートが接岸できる住宅などの空間をつくれれば拠点性が強調できるだろう。

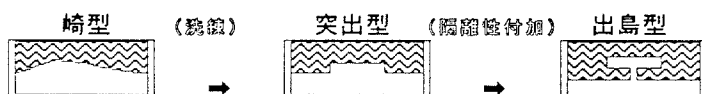


図2 凸型平面グループ

図2の凸型平面グループに共通する空間特性は誘引性である。これは、人々が好む視点となりやすく、人を呼び込みやすい特性である。従来は、神社や寺のように「神聖な場」としての利用が多かった。今後は、「象徴的な場」「ハレの場」として捉えられる空間整備が望まれる。例えば、出島型で水上のレストランや博物館などが提案できる。



図3 凸型立面グループ

丘型は、湖岸線の平面形状よりも背後地の立面形状に特徴がある空間である。空間特性は、眺望性がよくて、人が集まりやすいが(誘引性)、標高が高いため隔離性も持っている。このように反対の特性が同居しているため、うまく整備すれば相乗効果生まれる。簡単に行けないからこそ行きたくなるという人間の心理をついた空間だといえる。従って、丘頂部にどうしても行きたくさせるような魅力を創出する必要がある。

4. 結論と提案

本研究において湖岸景観に特徴的な景観の型を類型化し、整備の方針を示すことが出来た。今後は、景観の型という概念を軸に、琵琶湖岸の地域の固有性を付加する景観整備を行うことを提案する。

参考文献 1) 上島 顕司・篠原 修(1990): 伝統的な水辺のアース・デザインの型とデザイン原則に関する研究、土木計画学研究論文集No.8 PP249-256